

日本フランス語フランス文学会 2022 年度秋季大会  
2022年10月22日 (土)  
@大阪大学豊中キャンパス全学教育 B 棟

# フランス現代詩におけるソネと自由詩 ——ギュヴィックの短詩をめぐって

東京大学大学院・助教  
森田 俊吾(MORITA Shungo)



# 発表の流れ

## 1. ギュヴィックとはどういった詩人か？

——短詩(クアンタ)と主観的な投影

## 2. 自由詩から定型詩へ、そして再び自由詩へ

——音節数と脚韻に着目して

## 3. 脚韻と応答

——詩集『カルナック』と応答なき詩



# 発表の流れ

## 1. ギュヴィックとはどういった詩人か？

——短詩(クアンタ)と主観的な投影

## 2. 自由詩から定型詩へ、そして再び自由詩へ

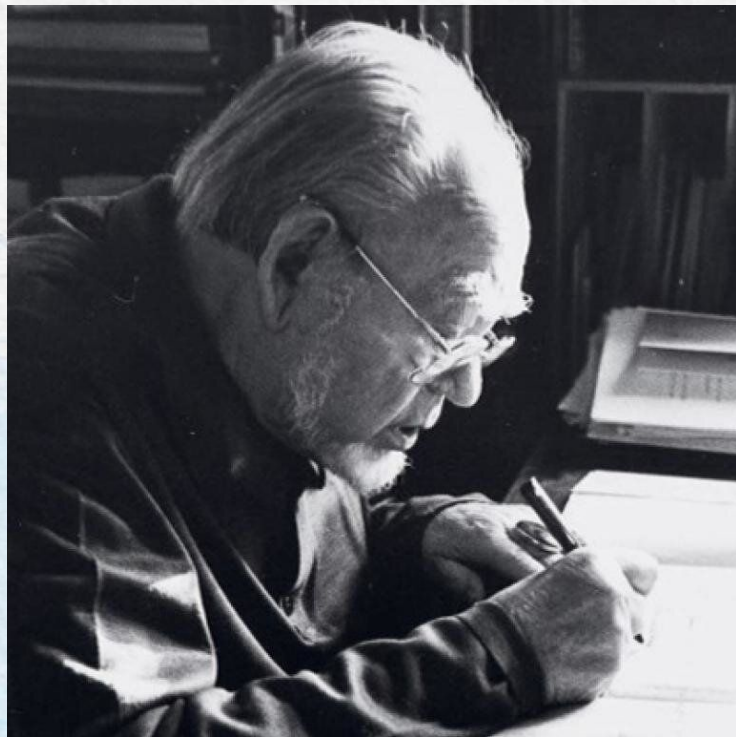
——音節数と脚韻に着目して

## 3. 脚韻と応答

——詩集『カルナック』と応答なき詩

# Eugène Guillevic (1907 - 1997)

- 1907年 8月5日、フランス・ブルターニュ地域圏のカルナックで生まれる。
- 1919年 スイスとの国境に近いフェレットに移る。ドイツ語とアレマン語を学ぶ。
- 1935年 パリに住み始め、経産省で働く。この頃からジャン・フォランなどパリの詩人と交流するようになる。
- 1942年 『水陸』 (Terraqué) の刊行。共産党に入党し、エリュアールと親交を結ぶ。
- 1954年 『31のソネ』の発表。アラゴンが序文を付す。
- 1961年 『カルナック』の刊行。
- 1963年 『半球』の刊行。以後多くの詩集をガリマール社から出す。
- 1997年 3月19日、パリにて没。



## 引用1

Des roses  
Qui ne pensent pas  
À être des roses.

薔薇たちは / 思ってはいない // 自分が薔薇であるとは。

## 引用2

L'armoire était de chêne  
Et n'était pas ouverte.

Peut-être il en serait tombé des morts,  
Peut-être il en serait tombé du pain.

Beaucoup de morts.  
Beaucoup de pain.

戸棚は櫛でできており / 扉が開かれていなかった。 //  
きっとそこから死体が落ちてくるのだろう。 / きっとそこ  
からパンが落ちてくるのだろう。 // たくさんの死体。 /  
たくさんのパン。

Guillevic, *Terraqué*, Paris, Gallimard, 1968(1991), p. 17.

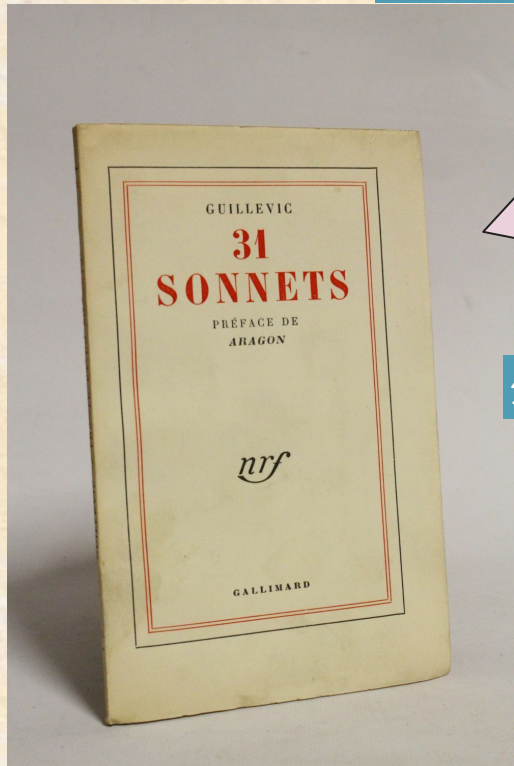
Si un jour tu vois  
Qu'une pierre te sourit,

Iras-tu le dire ?

もしある日君が / 石が微笑みかけてくるのを目にした  
ら // 君はそのことを言うだろうか？

# 1954年：定型詩（ソネ）への転身

引用4-a



なぜソネなのか？何よりもまず、自らの臆病さを打破して、飛び立とうとするとき、できるだけ遠くへ行こうとは思わないだろうか？ [...] そこに挑戦があり、賭けがあるのだから、大きく賭けてはいけないのだろうか？

« Expliquons-nous sur le sonnet », *La Nouvelle Critique*, n° 68, 1955, p. 126-127.

引用4-b

ソネは、韻を踏むという様式からしても、ナルシズムに都合が良い。殻の中に閉じこもるんだ。[...] あれは私の詩ではない。私の声でもないが、それでも何かしらの私でもある。それを否認することはしない。[...] 私は変わった。けれども否認にやっきになるわけではない。そこにはある種のナルシズムもあるだろう。

*Vivre en poésie*, 1980(2007), p. 131.



楽しみは我々にはほとんどなかった。  
楽しみを欲し、探し出さなければならなかった、  
我々の時代にはそれを掴み取らねばならなかった  
別れる恋人たちが最後にそうするように。

頭を上げ、打ち勝たねばならなかった、  
ほんの僅かな時間にも襲いかかってきた無数の悩みごとに対して  
希望にしがみつかなければならなかった。  
貧困が人を迷わせるのだと考えておくれ

君らは、君らはどうするのだ？ 楽しみを増やし  
作り出すために、戦わなければならないのだろうか？  
それか楽しみはいつも君らの中にあるのか、いつまでも、

それを思い浮かべずとも、柊がいつも緑であるように？  
ああそうだ、我々は夢見よう。さすれば世界は成熟し  
君らは望み高く生きていけよう — 我々がいなくとも、仲間たちよ、我々がいなくとも。

# 「ギュヴィック事件」と国民詩論争

## ギュヴィック・アラゴン側

1953年11月23日

ギュヴィックがソネをアラゴンに送る

1953年12月2日

アラゴン「国民詩について」でギュヴィックを紹介

1954年10月27日

『31のソネ』発表（アラゴンの序文付）

1955年9-10月

ギュヴィック『ヌーヴェル・クリティック』にて  
ソネに関する自身の考えを表明

## 国民詩・ソネに対する反応

1954年～

Henri Pichette、Charles Dobzynskiらが賛同し、  
定型詩（オードなども含む）を発表

1954年12月29日

ジャン・トルテルがギュヴィックの『ソネ』を批判

1955年1月

ピエール・ガルニエらが国民詩を「前衛の後退」で  
あると非難

1955年10-11月

エメ・セゼール「国民詩について」を発表

# 「ギュヴィック事件」を経て・・・

1954年 「31のソネ」 を発表

・  
・  
・

1959年 「道」 (*Chemin*) を発表

1961年 「カルナック」 (*Carnac*) を発表

1963年 「半球」 (*Sphère*) (「道」も所収)



「ソネ」以前／以後の自由詩（短詩）に変化はあるのか？あるとしたらどういった変化があるか？

GUILLEVIC

Sphère  
*suivi de*  
Carnac



*urf*

Poésie | Gallimard



# 発表の流れ

## 1. ギュヴィックとはどういった詩人か？

——短詩(クアンタ)と主観的な投影

## 2. 自由詩から定型詩へ、そして再び自由詩へ

——音節数と脚韻に着目して

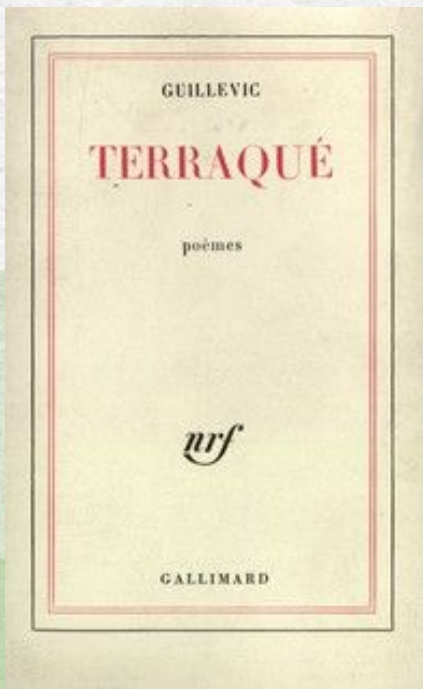
## 3. 脚韻と応答

——詩集『カルナック』と応答なき詩

# 1940～1960年代の詩形式の変遷

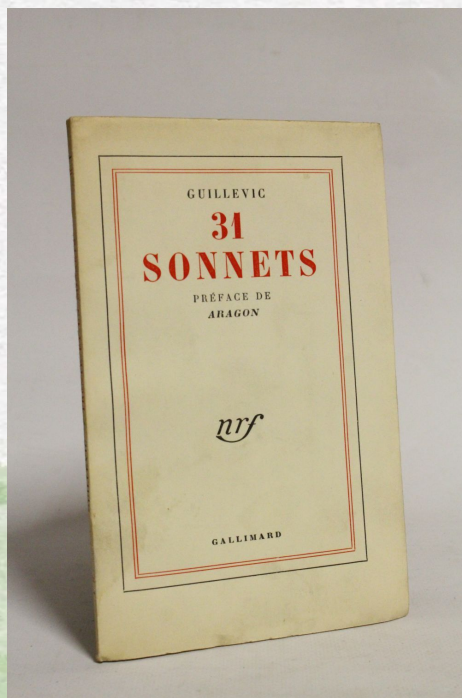
一部12音節詩句/脚韻使用

1942年  
(自由詩)



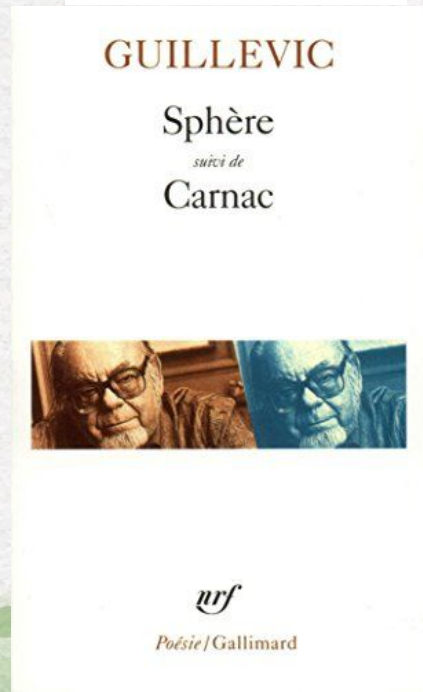
完全12音節詩句/脚韻使用

1954年  
(定型詩)



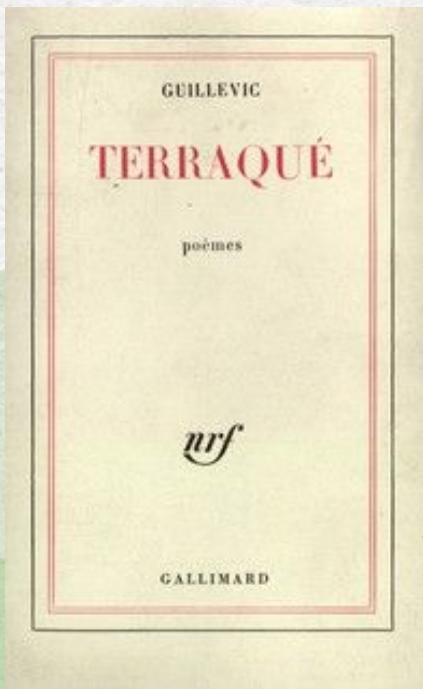
12音節詩句/脚韻が減少

1959～63年  
(自由詩)



# 1940～1960年代の詩形式の変遷

1942年  
(自由詩)



## 引用6

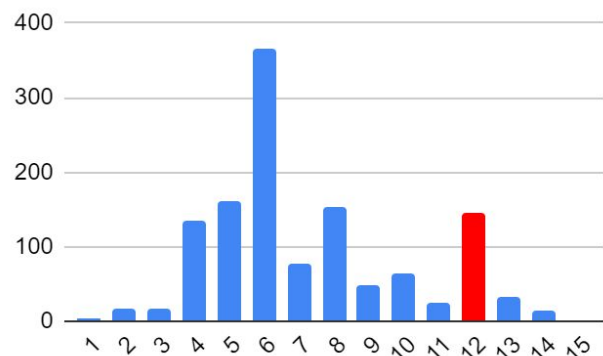
\* 12音節詩句や脚韻の存在が複数確認できる

S'ils avaient bien voulu m'appeler l'Innocent,  
Je n'aurais pas fait le mal et versé le sang.  
(« Récits », *Terraqué*, p. 88.)

Quand le jaune se fait présent comme d'un fruit,  
Devant les yeux fermés, dans le cerne de nuit,  
(« Hiver », *Terraqué*, p. 125.)

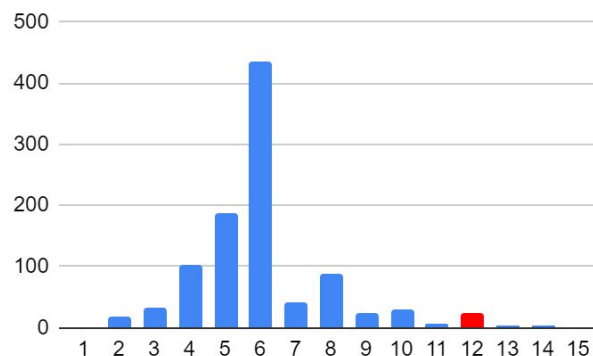
# 自由詩作品群における12音節詩句の使用頻度

*Terraqué* (1942)



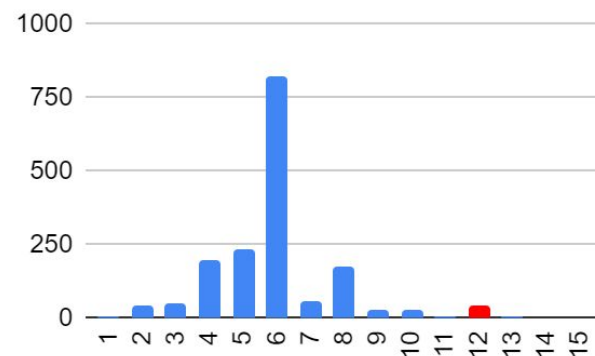
12音節詩句の出現回数  
→145回 (1254詩句中)  
(出現頻度11.56%)

*Carnac* (1961)



12音節詩句の出現回数  
→42回 (1684詩句中)  
(出現頻度2.49%)

*Sphère* (1963)



12音節詩句の出現回数  
→23回 (995詩句中)  
(出現頻度2.31%)

Auprès d'une eau trouvée  
Dans un ruisseau de mai,

La douceur était là,  
Qui manquerait.

\*

Vous étiez entre vous, buissons.  
C'était permis.

\*

5月の小川で  
見つけた水の近くに、

失われかけていた  
穏やかさがそこにあった。

茂みたち、君らは自分たちの中にいたんだ。  
そうすることができたんだ。



Envers les puits la lune  
Avait de la pitié,

Mais entre les bois  
Les prés criaient

Et par la lumière de la lune  
Revenaient leurs cris.

井戸に向かって月は  
哀れみの念を抱いていた、

けれども木々の間で  
草原は叫んでいた

そして月明かりに照らされて  
その力強い声が戻ってきた

## « Chemin » 冒頭詩句の音節数

1 2 3 4 5 6  
Après d'une eau trouvée

1 2 3 4 5 6  
Dans un ruisseau de mai,

1 2 3 4 5 6  
La douceur était là,

1 2 3 4  
Qui manquerait.



### 3. 脚韻と応答

——詩集『カルナック』と応答なき詩

Mer au bord du néant,  
Qui se mêle au néant,

Pour mieux savoir le ciel,  
Les plages, les rochers,

Pour mieux les recevoir.

虚無のほとりにある海、  
虚無と溶け合っている、

空をもっとよく知るために、  
砂浜を、岩礁を知るために、

それらをもっとよく受け取るために。

\*

Femme vêtue de peau  
Qui façonne nos mains,

Sans la mer dans tes yeux,  
Sans ce goût de la mer que  
[nous prenons en toi,

Tu n'excéderais pas  
Le volume des chambres.

皮膚を身に纏って  
私たちの手を捏ねる貴女、

あなたの瞳の中に海がなければ、  
私たちがあなたの中で味わうこの潮の  
[香りがなければ、

あなたは部屋の広さを  
超え出ることはないだろう。

\*

La mer comme un néant  
Qui se voudrait la mer,

Qui voudrait se donner  
Des attributs terrestres

Et la force qu'elle a  
Par référence au vent.

虚無のような海  
海であろうとし、

大地の特性を  
得ようとする

そして風を頼りに  
力を持つ。

\*

J'ai joué sur la pierre  
De mes regards et de mes doigts

私は石に賭けた  
自身の目と指を使って

Et mêlées à la mer,  
S'en allant sur la mer,  
Revenant par la mer,

やがて海と混ざり、  
海へと出て、  
海を渡り帰ってくる、

J'ai cru à des réponses de la pierre. 石からの応答を信じた。

『カルナック』（冒頭より抜粋）

第1パート

Mer au bord du néant,(6)

Qui se mêle au néant,(6)

Pour mieux savoir le ciel,(6)

Les plages, les rochers,(6)

Pour mieux les recevoir.(6)

\*

第2パート

Femme vêtue de peau(6)

Qui façonne nos mains,(6)

Sans la mer dans tes yeux,(6)

Sans ce goût de la mer que nous prenons en toi,(12)

Tu n'excéderais pas(6)

Le volume des chambres.(6)

第3パート

La mer comme un néant(6)

Qui se voudrait la mer,(6)

Qui voudrait se donner(6)

Des attributs terrestres(6)

Et la force qu'elle a(6)

Par référence au vent.(6)

\*

第4パート

J'ai joué sur la pierre(6)

De mes regards et de mes doigts(8)

Et mêlées à la mer,(6)

S'en allant sur la mer,(6)

Revenant par la mer,(6)

J'ai cru à des réponses de la pierre.(10)



## ギュヴィックの脚韻に対する考え

自分[=詩人]の言葉は、反響して神の言葉に取って代わるようになり、それゆえ韻を踏む。言葉は自ら応答する。[...] そして、ニーチェが言ったように、神が本当に死んでしまったとき、宗教がもはや意識を支配しなくなったとき、人間が自分自身の価値を確立したとき、学者も芸術家も、そして何より真の言語であり万人に共通する言語を話す詩人は、その瞬間に脚韻という深遠な論拠を失ってしまうのである。[...] 反響としての存在理由がなくなるとき、韻は消える。)

(Choses parlées, p. 78-79.)

再び...引用4 「ずっとのちのひとびとに」 (『31のソネ』より)

[...]

Vous, comment ferez-vous ? Vous faudra-t-il lutter  
Pour augmenter la joie et la réinventer ?  
Ou l'aurez-vous toujours en vous, heure après heure,

Sans y penser, comme du vert est dans le houx ?  
Oui, nous rêvons. La terre alors sera majeure  
Et vous vivrez très haut — sans nous, frères, sans nous.

[...]

君らは、君らはどうするのだ？ 楽しみを増やし  
作り出すために、戦わなければならないのだろうか？  
それか楽しみはいつも君らの中にあるのか、いつまでも、

それを思い浮かべずとも、柊がいつも緑であるように？

ああそうだ、我々は夢見よう。さすれば世界は成熟し

26 君らは望み高く生きていくだろう—我々がいなくとも、仲間たちよ、我々がいなくとも。

## 『カルナック』における応答なき問いかけ

Infatigable, fatiguée —  
Mais quelle est l'épithète  
Qui ne te conviendrait?

疲れを知らぬ、疲れ果てた——  
だが一体どんな形容詞が  
君に似合うと言うのだろうか？

L'insidieux est notre passé,  
Chargé sur nous de représailles.

狡猾なのは私達の過去であり、  
報復の重荷を負わされている

Pourquoi faut-il que l'on t'y  
[trouve,  
Océan, accumulation?

どうしてそこで君を見出す  
[必要があるのか？  
大いなる海、積み重なっていく者よ。

『カルナック』における海と〈私〉の距離

Toi, ce creux  
Et définitif.

お前はあの空洞  
それも決定的な。

Moi qui rêvais  
De faire équilibre.

釣り合いを取ろうと  
夢見ていたのは私。

# 【まとめ】結論と今後の展望

- 「ソネ」を経てからの詩作は、初期の自由詩よりも短くなっていき、12音節詩句の使用が減っている
- 復帰後の自由詩において、明らかな韻律形式は減少したが、それを作品内で昇華した箇所が見受けられる。特に「カルナック」においては、脚韻の不在が、応答なき問いかけという作品そのものの形式と対応している
- 〈今後の課題〉他の作品や他の現代詩人においても韻律形式がどのように応用されたかを検討



↑1968年5月の時のギュヴィック：ゴダール、ジュフロワ、ルーボーらとともに

ご清聴ありがとうございました

## 参考文献

- ARAGON Louis, *Journal d'une poésie nationale*, Lyon, Les écrivains réunis, Henneuse, 1954.
- BARON Emmanuel, « Idéologie et travail de la forme dans les sonnets de Guillevic », dans MONTIER Jean-Pierre (éd.), *Mots et images de Guillevic*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2007, p. 217-245.
- BOWD Gavin, « Guillevic and poésie nationale : The Final crisis of French Zhdanovism », *Forum for Modern Language Studies*, XXIX, n° 2, avril 1993, p. 111-125.
- DEBREUILLE Jean-Yves, « L'être et le paraître : l'épisode des sonnets », GAUBERT Serge (éd.), dans *Lire Guillevic*, Lyon, Presses universitaires de Lyon, 1983, p. 67-86.
- DEGOTT Bertrand, « Pour une poétique du sonnet », dans LARDOUX Jacques(éd.), *Guillevic. La passion du mode*, Angers, Presses de l'Université d'Angers, 2003, p. 123-135.
- DEGOTT Bertrand, « Le vers entre maison et horizon », dans *Mots et images de Guillevic*, MONTIER Jean-Pierre (éd.), Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2007, p. 207-216.
- DEGOTT Bertrand, « Des "Hommes de plus tard" aux Sonnets de tous les jours : le sonnet de 1953 à 1958 », dans MICHAEL Brophy (éd.), *Guillevic : la poésie à la lumière du quotidien*, Bern, P. Lang, 2009, p. 145-165.
- DEGOTT Bertrand, « Le Sonnet en 1954 : Réception et situation », *Notes Guillevic*, n° 8, automne – hiver 2018, p. 43-56.
- DEGOTT Bertrand, « Maintenant e(s)t tous les jours », dans *Guillevic maintenant : colloque de Cerisy*, 11-18 juillet 2009, Paris, Honoré Champion, 2011.
- FOURNIER Bernard, *Le cri du chat-huant : le lyrisme chez Guillevic*, Paris, Harmattan, 2002.
- FOURNIER Bernard, « Guillevic et la poésie civique », *Notes Guillevic* Notes, 17 décembre 2021, p. 33-88.
- GIOVANNONI Jean-Louis et VILAR Pierre (éd.), *L'expérience Guillevic*, Paris, Deyrolle Opales, 1994.
- GUILLEVIC, *31 sonnets*, Paris, Gallimard, 1954.
- GUILLEVIC, « Expliquons-nous sur le sonnet », *La Nouvelle Critique*, n° 68, 1955, p. 116-128.
- GUILLEVIC, *Terraqué*, suivi de *Exécutoire*, Paris, coll. « Poésie/Gallimard », Gallimard, 1968.
- GUILLEVIC, *Sphère*, suivi de *Carnac*, Paris, coll. « Poésie/Gallimard », Gallimard, 1977.
- GUILLEVIC, *Du domaine*, suivi de *Euclidiennes*, Paris, coll. « Poésie/Gallimard », 1985.
- GUILLEVIC et ERHEL Jean-Yves, *Un brin d'herbe*, après tout, Cesson-Sévigné, La Part commune, 1998.
- GUILLEVIC et RAYMOND Jean, *Choses parlées : entretiens*, Seyssel, Editions Champ Vallon, 1982.
- GUILLEVIC et LARDOUX Jacques, *Humour-"Terraqué" : entretiens-lectures*, Saint-Denis, Presses universitaires de Vincennes, 1997.
- GUILLEVIC et LUCIE Albertini et VIRCONDELET Alain, *Vivre en poésie ou l'épopée du réel*, Paris, Le Temps des Cerises, 2007. (『ギュヴィック自伝 詩を生きる』、服部伸六訳、青山館、1984年)
- HARVEY Stella, *Myth and the sacred in the poetry of Guillevic*, Amsterdam, coll. « Faux-titre », 1997.
- LOPO Marfa, *Guillevic et sa Bretagne*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, coll. « Plurial », n° 13, 2004.
- MESCHONNIC Henri, « Avec Guillevic », *Europe*, n° 663-663, 1984, p. 166-176.
- RANNOU Pascal, *Guillevic : du menhir au poème*, approche de Guillevic, Morlaix, Skol Vreiz, 1991.
- STOUT John Cameron, *Objects Observed : The Poetry of Things in Twentieth-Century France and America*, Toronto, University of Toronto Press, 2018.
- VUONG Thomas, *Usages du sonnet européen (Allemagne, France, Grande-Bretagne, Italie) durant la Seconde Guerre-Mondiale (1939-1945)*, Thèse de doctorat, Université Sorbonne Paris Cité, 2017.
- WASSELIN Lucien, « Pour une nouvelle lecture des Trente et un sonnet de Guillevic ou le fantôme de l'Alexandrin », *Faites entrer l'infini*, n° 42, p. 6-9.
- ギュヴィック『ギュビック詩集』、大島博光訳、飯塚書店、1970年。

スライドで使用した画像：

<https://www.edition-originale.com/fr/litterature/editions-originales/guillevic-31-sonnets-1954-57998>

[https://www.ot-carnac.fr/content/uploads/2019/11/belle-ile-en-mer-plage\\_Marc-SCHAFFNER.jpg](https://www.ot-carnac.fr/content/uploads/2019/11/belle-ile-en-mer-plage_Marc-SCHAFFNER.jpg)

[https://www.freepik.com/free-vector/abstract-watercolor-flow-background\\_13982650.htm](https://www.freepik.com/free-vector/abstract-watercolor-flow-background_13982650.htm)

<https://www.blind-magazine.com/news/jean-luc-godard-or-the-revolution-of-language-and-image/>

<http://www.barapoemes.net/archives/2019/03/30/37217769.html>

**\* 本研究はJSPS科研費21K19977の助成を受けたものです。  
\* 本研究を進めるにあたり助言を下された、工藤貴響さん・  
伊藤琢麻さん、ありがとうございます！**